

の中核となって、人間としての在り方、生き方を考えていかなければならないのである。

中教審答申の中では、これまで述べてきたような改革の動きに応え、21世紀を生きる子どもたちに培うべき能力を、「生きる力」という言葉をキーワードにして、次のように述べている。

- 自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力
- 自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性
- たくましく生きるための健康や体力

つまり、問題解決力、豊かな人間性、そして、たくましく生きるための健康や体力、この3つを総合的に育むことが「生きる力」を育てることになるというように考えることができる。この3つは独立してあるものではなく、複雑に絡み合い、有機的に結びついた構造になっており、総合的に育んでいく必要がある。

II 研究課題設定の背景と「生きる力」

研究課題である『「生きる力」としての『学力』を育てる学校教育の創造』は、今日の学校教育が抱えている深刻な諸問題の解決と、先行き不透明な時代にも子どもたちがなお、明るくたくましく生きていけるような力を育てることができる学校教育のあるべき姿を求めて設定した。

つまり、学校教育の今日的課題を研究の動機として、「生きる力」としての「学力」を育てる学校教育を具現するための方策を探るものである。

この研究の動機としての学校教育における今日的課題は、そのまま研究課題設定の背景であり、中教審答申が「生きる力」をその中核にしなればならなかった背景と全く同じである。

その背景とは、1つに近年になって急変した子ども

たちの生活の現状であり、2つに、その子どもたちの生活の現状の中でも特に憂慮されるいじめや登校拒否、校内暴力、受験競争等の問題である。

こうした子どもたちの生活とそれを取り巻く環境は、これから先も激しい変化を余儀なくされるに違いないが、それはまさに先行き不透明な、変化の激しい時代に身を置いて生きていかなければならない厳しい試練なのである。ここに、予測することが難しい「これからの社会」の変化に対応できる能力を子どもたちに育てなければならぬという3つ目の背景がある。

「生きる力」を問題にしなければならない背景は中教審の答申に要約されるのであるが、次に、3つの観点から研究課題設定の背景を、さらに具体的に述べてみたい。

1 子どもたちの生活の現状

子どもたちの中には、学校での生活や塾、自宅での勉強等の時間のほか、テレビ、パソコン等のメディアとの接触にもかなりの時間を費やし、ゆとりのない忙しい生活を送っている子どももいる。

また、群れて遊ぶことが少なくなった子どもたちには生活経験や自然体験の機会が減少するとともに擬似体験や間接体験が多くなる傾向にあり、子どもたちの社会性不足や人間関係をつくる力が弱まっていることが危惧されている。

さらに、子どもたちを対象にした日常生活や自分の将来に関する調査では、子どもたちの自立の遅れや倫理観の欠如など、心の教育の問題とともに、体力・運動能力についても筋力や持久力の衰え等が指摘されている。

こうした子どもたちの生活の現状が「生きる力」を問題にする1つの背景になっているのである。

2 特に重要な課題

「生きる力」を問題にしなければならない要因には、次に述べる3つの課題がある。